

宇陀を駆けた人々

7
本居宣長 篇 1

4月より連載してきた「宇陀を駆けた人々」。古代から現代まで多くの人々が宇陀を駆けぬけて行きました。宇陀の歴史に欠くことのできない人々。今回は掲載3人目となる、本居宣長を3回に分けて紹介していきます。

松坂の古典研究家

享保15年（1730）、伊勢国松坂の木綿商の家に生まれ、のちに医者となった人物がいました。彼の名は、本居宣長（もとおりのりなが）。国学者・文献学者としても活躍しました。

医業の傍ら、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』、平安文学などの研究を行いました。当時、十分に解読できていなかった『古事記』の解読に成功し、『古事記伝』という書物を明和元年（1764）から寛政10年（1798）にかけて執筆しました。そして、版本としての刊行は、寛政2年（1790）から文政5年（1822）にかけて行われました。このように長い年月をかけて完成した『古事記伝』は、『古事記』の註釈書というだけでなく、のちの古代文学や古代史の研究にも大きな影響を与えています。現在の『古事

記』の註釈書は、基本的には宣長の採用した読み・解釈にその後の研究による訂正を加えたものが主流となつていくといつても過言ではありません。宣長は、古典の調査・研究などのため、各地を旅しました。明和9年（1772）の3月5日から14日（旧暦）には、宣長ら一行6名が松坂（松阪）から吉野や飛鳥を巡りました。宣長は、この旅の様子を寛政7年（1795）刊の『菅笠日記（すがさのつぎ）』という書物にまとめています。



文・柳澤一宏（文化財課）



「江戸しぐさ」で心豊かに！

皆さんは「江戸しぐさ」という言葉を聞いたことがありますか？

徳川家康が江戸に幕府を開いてから、それまで

寒村だった江戸は、全国から文化や習慣の違う人々が集まってきた、世界最大級の都市に発展しました。さまざまな人たちが仲良く平和に暮らすためにはどうすればよいかということでも生じたのが「江戸しぐさ」であり、みんなが快適に過ごすための知恵でもありました。

「江戸しぐさ」は今風に言うとう江戸庶民の「公衆マナー」「コミュニケーションスキル」とも言えるので、江戸っ子たちが使っていた世間とのつき合い方や他人との関わり方などの所作全般を言います。これは日本特有の「相手を思いやる心」を形にしたものと言えます。

「江戸しぐさ」のひとつに「うかつあやまり」というものがあります。例えば、足を踏まれたとき、踏んだ人は謝りますが、踏まれた人も「私もうつかりしてました」と言って、相手の過失を責めないことで、その場の雰囲気や和みます。

ここで「江戸しぐさ」をいく

つか紹介したいと思います。

「傘かしげ」

雨の日に道ですれ違う際、お互いの傘を外側に傾け、相手が濡れないようにすること。

「横切りしぐさ」

人の前を通るときに、手刀を振って通ること。

「時泥棒」

アポイントなく相手を訪ねていたり、約束の時間に遅れるなど相手の時間を奪うのは重い罪であること。

「昨今、自分さえよければ」「他人なんてどうでもいい」という自己中心的な人が増えてきたように感じます。「自分だけ」ではなく「自分も他人も」それぞれが気持ちよく過ごすためにはどうすれば良いか。自分の言動が相手にどのような影響を及ぼすのかも一度考えてみませんか？相手の気持ちや立場を思いやるのが「特別」なことではなく「当たり前」といえるような世の中になつてほしいですね。



参考：NPO法人江戸しぐさホームページ